



Title	コータンの「木ぶり」と「根ぶり」
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	史滴. 2004, 26, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コータンの「木ぶり」と「根ばり」

荒川 正晴

今夏、十三年ぶりに新疆のコータン地区を訪れた。中国の「西部開拓」政策のもと、経済発展の波がここにも押し寄せており、コータン市には高級感溢れるシテイホテルができていた。またオアシスを繋ぐ道路事情も破格に良くなり、タクラマカン沙漠を縦断する舗装道路さえもコータンから延びていた。とくに印象深かったのは、沿道に古代の烽燧址とともに、「中国移動通信」のステーションが点在していたことで、沙漠のと真ん中でなければ、携帯で中国全域どころか日本にも電話することができる。

これからもコータンだけでなく、新疆各地は中国内地からカネとヒトの大きな波を受けつつ、その外観を大きく変貌させていくに相違ない。十三年前と比べて、町の中には明らかに漢人の姿が目につくようになっていた。コータン（とくに農村部）の人々が、現在こうした「経済的な恩恵」に直に浴しているとも思えないが、徐々に彼らの生活が経済的に底上げされてゆくことは十分に予想できる。

他方、こうした外面での大きな変動とは対照的に、コータンという土地にある不動の根っこ部分にも触れることができ

た。たとえば、今回の調査では、コータン市の西南方、カシユ河東岸にある Kohanri Hill に行ったが、ここは『大唐西域記』に出てくる「牛角山精舎」の遺跡がある丘で、牛角山の巖壁にある大きな石室には、滅心定に入り弥勒菩薩が出世するのを待つ阿羅漢が居たという。コータン国では、数百年間もこの石室にいる阿羅漢を供養していたとされるが、実はコータンが十一世紀以降にイスラーム化した以降も、この遺跡は聖地として崇拜され続けたようである。今でも、「牛角山」の丘の上にはマザールが設けられ、八月・九月の毎週木曜日にはコータンその他のオアシスから多くの人々がお参りに来ている。

またコータン市の西方にある Somiya にも行ったが、ここは『大唐西域記』に出てくる「娑摩若僧伽藍」と見られ、遠方から来たある沙門が神通力を現し、コータン国王が仏教信仰を篤くした所として伝えられている。この地も、コータンがイスラーム化した以降も聖地として崇拜され続けており、現在でも多くのマザールが設けられている。つまり仏教遺跡があった所は、今でも聖地として崇拜されていることが多いのである。これは何もコータンに限ったことではなく、その他のオアシスでもよく見られる現象である。

中央アジアの歴史を評して、仏教からイスラーム教への変化を念頭に「木に竹を接いだよう」と表現する場合もあるが、これが如何に表面的な形容であるかを実感した旅でもあった。

(大阪大学大学院文学研究科教授)